

Series

聞く



Vol.6 西脇市長
来住 壽一さん

KSRS RICHEでは、北播磨での市民活動にご理解いただき、支援されている方、あるいは活動されている方々に対し、シリーズ「聞く」と題してインタビューを行っております。
第6回目は、平成18年11月20日に西脇市長にお伺い致しました。

北播磨はそれぞれに独自の顔を持っています。西脇と言えば、播州織。糸から染めあげ、布を織る先染綿織物の産地です。生産量は減ってきていますが、ものをつくりあげてきた根づよいパワーがあります。200年を超える伝統と60もの工程を支えてきたのは、少々のことではへこたれない家内工業の力です。「もっと身近なところ、もっと小さなものでいいから、自分たちでテーマと方向を考えよう」と、来住市長は、地域づくりに動き出した8地区の市民に呼びかけます。ものづくりで培われてきた人と人の支えあい、地道な努力、かたちにして喜びを分かちあう心。細くても切れない糸を紡いできた人たちが自らの手で「日本のへそ」を元気にしようと、地区からのまちづくりに取り組んでいます。

「土があり、風がある」

—まず、市民活動から見た北播磨について、お聞かせ願えますか？
人の活動には土と風の活動があります。北播磨市民活動支援センターのみなさんは、風の活動をなさっている。北播磨という広い地域を考える論理性を持った地元の人たち。この活動が進んでいくと、都会的な発想になるのでしょうか。
土は、よそのことはわからないけれど、この土地のことならなんでも知っている。論理よりもパワーがある。ずっと住んできて、人を動かす力や隣同士の輪を持っている。この田舎的な「土」と、都市的な「風」。北播磨はどちらも兼ね備えています。この土の活動と風の活動が、うまく両立していけばいいですね。

—播州織の空き工場跡を保存して、デザイン工房を作ろうという動きもありますが、ものを作り続けてきた「土」の器に、若い人たちが「風」を送り込む。まさに「土と風の活動」なんですよね。
昔、北播磨の人たちは加古川の恵みを受けて農業を主産業としていました。この地域の人たちが農家の副業として、1792年に織物を始めたんです。播州織は家内工業に支えられる部分が多く、自分たちの力でもものを作り続けてきたプライドを持っています。糸を染めるにしても、一万五千色を見分ける目を持った職人さんがいます。もし色という世界で生きることができたら、色の世界をリードする人になると思います。

しかし、そういう職人気質の匠と呼ばれる人たちは、自分の持っている力をあまり評価しない。織物産業は、地味でしんどい仕事であり、子どもにはもっと広い世界で活躍して欲しいと、後継者を育ててこなかったことをみても、自分が凄い能力を持っていることを意識してこなかったからだろうと思います。ものを作る技術はあっても、技術だけで終わってしまう。ものづくりのノウハウを生かした地域づくりを目指すのは、なかなか難しいものです。そういう意味でも、若い人たちが自ら、ノコギリ屋根が特徴的な空き空間で何かをしようという活動は、大変嬉しいことです。

「文化の素地は、播州織から」

—市民会館には企画委員会「ゼロ」があり、アピカホールには「しばざくら実行委員会」というボランティアの活動が古くから盛んですが、そういう「何かしてやろう」という人が育つ土壌として何が大切だと思われますか？
文化というものは一朝一夕で仕上がるものではありません。文化不毛だと言われていた西脇が、昭和42年に大きく変わりました。古くなっていた市役所より先に、立派な市民会館を建てた。すると、フルに活動し始めました。これも、文化の素地があったからなんです。素地がなかったら、建物を建ててもうまくいかなかったでしょう。
昔はそれぞれの家で謡曲や琵琶、琴、俳句などいろんな伝統的な生活文化が継がれていました。織物の隆盛によって、結社的な活動へ発展し、生活文化が芸術文化へと高まっていきました。それが一気に社会へ噴き出して、本物の文化活動ネットワークが生まれたのです。それも「互いに、領域は侵さない。だけど謡曲の会をやるなら、俳句をやっている人たちも手伝おう」といった具合にお互いが支援していくというやり方でした。



ノコギリ屋根
西脇は播州織の町。町には織物産業のシンボルであるノコギリ屋根工場が残っています。この建物は北側に採光面がとってあり、太陽の光で織物が日に焼けないように、また、雨でも風でも室内の明るさを一定に保てるように工夫されています。その特殊な屋根には、色彩や繊維の組織など、織物の細かな表情を読み取るための知恵が込められています。



北はりま田園空間博物館
総合案内所

西脇市

旧来住家住宅

「自分たちの手で手ごたえを感じる」

例えば、アピカホールが10周年を迎えて、市民ミュージカルをやったんです。これが最高！感動しましたね。あれ程、自信に満ちた子供の顔を見たのは、久しぶりでした。衣装もメイクも全部ボランティア。それも、様々な業界トップのお偉いさんが裏方を喜々としてやってくれている。みんな楽しんでやっている。やりがいを感じている。時間はかかりますが、こういうところから市民文化が育っていくように思います。

まず、いろんなことを経験するチャンスを作ること。一緒にやろうや、と人を呼び込みながら、こつこつ地味なことでも真剣に取り組むと、それがかたちになる。そこに、人が喜びを感じ、ふるさと感じ、自分の存在を感じるようになってくるのでしょう。

実は、そういう市民の自主性を目の当たりにするのが、行政マンの喜びでもあるんです。市民ひとりひとりが、自分たちの手で自主的にいろんなことをやっていく。そして、自分なりの手ごたえを感じる。ここで自立する力が生まれてきます。これが大事なことです。やったのには何も残らなかったでは、互いに喜びもなく、後が続かないことになります。



旧来住家住宅

「北播磨田園空間博物館って、どこにあるの？」

西脇から多可町まで、あちらこちらに。だって、屋根のない博物館だもん。へそ公園から千ヶ峰、ラーメン屋まであるよ。200のサテライトを辿っていくと、そこは楽しいこと満載の日本一長い散歩道。まずは、「道の駅北はりまエコミュージアム」へ。(TEL: 0795-25-2370) 案内所で地図をもらって、さあ、どこへ行こう？



北播磨田園空間博物館総合案内所

「こぼれ話」先生のランキング

「まず語るだけの先生。その上が、自分で行動して体験させる先生。その上が、自分で動いて、人に感動を与えられる先生」

「いつまでも住んでいたいまちづくり」

—最後に、西脇が将来、こういう町でありたいという目標をお聞かせください。

市民が、ふるさとに誇りを持って、いつまでも住んでいたいと感じられる…そんなまちにしたいですね。そのためには、一人ひとりがふるさとかかわって生きることが大事です。まちづくりもこれからは、市民自らが考え、行動する時代です。

西脇では、市民の定住志向が強く、また、ボランティア活動やまちづくり活動への参加志向が50%以上もあります。半分以上の人が、アクティブな活動をする、一体どんなまちができるのでしょうか。みんなの力と知恵でまちづくり運営ができるようになると、そこには、郷土愛に満ちた、いつまでも住んでいたいと感じることのできる素晴らしいまちが誕生するのではないかと期待しています。市民の皆さんが「よし、やってみよう！」と、活動できる舞台づくりや仕組みづくりをどう展開していけばいいのか、それを考えているところです。

市民の皆さんが主役になって進めてほしいテーマを三つ提唱しています。

一つは、地区からのまちづくり。二つ目は、地域に根ざした温かい福祉の絆づくりです。そして三つ目は、地域教育力を高めること。これらは、みんなが関心を持っていることだと思っています。こうしたヒューマン・アクティブ・ネットワークづくりが、今、各地域で取り組まれています。

市内8地域で、既に4つのまちづくり計画が生まれました。地域福祉を支える関係者が集まって、自治会ごとに懇談会が開催されています。地区ごとに子供見守り隊やハーティネス・メンバーズ・クラブが活動の輪を広げています。

市民の皆さんが主役になって、「人、まち、産業が元気なまち・西脇」を目指していきたいと願っています。

皆さんのように、小野市のうるおい交流館を市民の手で管理運営されていると、いろんな喜びと誇りが生まれてくると思います。そうした実践活動が市民性を高め、ふるさとを高めていくのだからと考えています。お互いに、頑張っていってまちをつくっていきましょう。

インタビューを終えて

人の顔が見えてくる。西脇から世界に羽ばたいた横尾忠則や長谷川穂積から、旧来住家住宅の草がぼうぼうだった庭を剪定するボランティアさんまで。自立していく子どもの成長を見守る親のように、目を細めながら、市民が生き生きと市民活動に励む姿を、あたたかく語ってくださった。「そんな時、行政マンはひとり涙するんです。」市民の自立を願う市長ならではの言葉が、ボランティアの新米インタビュアーの胸に響いた。

